

平成 27 年度「キャリア教育・就労支援等の充実事業」成果報告書

受託団体名

岡山県教育委員会

I 概要

1 モデル地域の概要

①モデル地域の種類 ※Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のいずれかに○を付してください。

○	Ⅰ型（連携型：特別支援学校高等部及び高等学校の連携）
	Ⅱ型（単独型：特別支援学校高等部のみ）
	Ⅲ型（単独型：高等学校のみ）

②モデル校の一覧

設置者	学校種	学校名（ふりがなを付すこと）
岡山県	高等学校	おかやまけんりつくらしきわしゅうこうとうがっこう 岡山県立倉敷鷺羽高等学校
岡山県	特別支援学校	おかやまけんりつくらしきこうとうしえんがっこう 岡山県立倉敷琴浦高等支援学校

2 研究課題

生徒の自己理解を深め、関係機関と連携した進路指導の充実に関する研究

3 研究の概要

障害のある生徒への就労支援に関する取組は、特別支援学校において蓄積されている。特に、関係機関との連携を図ることや、現場実習等で実際の現場で働くことを通して、就労に対する意欲を育て就労につなげてきた。また、本県では一人一人のニーズや特性に応じた就労を目指すために中心となって職場及び現場実習先の開拓を行う人員を配置し、就労への取組に成果をあげてきた。一方、高等学校においては、発達障害のある生徒に対して就労支援に関する取組を行う必要があるが、必要な取組についての蓄積がないために、十分な取組が行われていないのが現状である。

このような現状を踏まえ、昨年度は、発達障害のある生徒が在籍する高等学校と特別支援学校が連携し、特別支援学校に蓄積されている就労支援に関する取組を高等学校の進路指導に活用する研究を行った。本年度は、昨年度の取組の成果を受け、高等学校の進路指導がより充実したものになることを目的とした研究を行う。特に注目したい点は、就労するためには、自己理解が大切である点、関係機関との連携が必要である点である。そこで、今まで行われてきた特別支援学校での就労支援のための授業や現場実習等を通して、生徒の自己理解を促す取組を反映させていく必要がある。また、高等学校は、障害者枠での就労についての理解や手続き等を理解し、ハローワークと連携し、障害者枠での就労を活用することも必要であると考ええる。

研究内容としては、昨年度同様、学校間での授業公開を行い、特別支援教育の観点を取り入れた授業改善を図るとともに、就労支援に関する知見を有する外部講師を招へいし、校内研修を行うことにより、発達障害のある生徒が就労する場合の重点を明確にし、進路指導に活かす。また、本年度は、先進的な取組を行っている高等学校や特別支援学校への

視察を行い、参考になる取組を整理し、進路指導に活かす。

さらに、昨年度同様、障害を理解して雇用を検討する企業を開拓することが非常に重要であると考えられることから就労支援コーディネーターを配置する。

これらの取組を通じて高等学校段階における生徒へのキャリア教育を推進していく。

4 研究の成果

○就労支援ネットワーク会議（5月と2月の2回実施。2月は事業報告会も兼ねた。）

倉敷琴浦高等支援学校と倉敷鷺羽高等学校の連絡・調整だけでなく、幅広く意見を求めたり、方向性の確認をしたりするために、大学教授、就労支援機関や企業の方々にメンバーに入っていただき、会議を開催した。毎回、取組の方向性の確認や新たな知見をいただくことができた。

○進路開拓の実際 就労支援コーディネーター訪問等事業数

◇倉敷鷺羽高等学校

- ・行政機関・企業等 90 社／機関 ・企業との電話調整 147回
- ・学校訪問 30回 ・研修会 7回

◇倉敷琴浦高等支援学校

- ・行政機関等 115社/機関 ・企業等 65社
- ・見学案内 8社 ・企業との電話調整 445回
- ・生徒や保護者面談 12回 ・会議 11回

○両校の取組

◇倉敷鷺羽高等学校

- ・就労に向けた校内支援体制の構築については、診断のある生徒に面接を行い、障害者枠での就労希望者に対して、早めに支援体制を整えてきている。
- ・本人を支えるネットワーク作りでは、ハローワークや支援センターと連携が取れる関係が作れ、マップの作成ができた。
- ・特別支援学校の視点を取り入れた授業を行うことができた。
- ・就労支援コーディネーターの配置で、障害者枠での就労についての知識が深まった。また、教職員や保護者対象に研修会を開催することができた。

◇倉敷琴浦高等支援学校

- ・現場実習事前・事後学習の工夫では、実習場所や実習期間を含め、再検討をしながら取り組んでいる。また、実習日誌や振り返りシートの改正をおこなった。
- ・キャリア教育の推進では、キャリア教育の視点（特に自己理解）を取り入れた授業実践を行い、授業研究会(10月)や公開授業研究会(2月)を行った。授業改善そのものだけでなく、授業反省の持ち方まで改善することができた。
- ・就労支援コーディネーターの配置により、企業の情報が多く入り、職場開拓も進んだ。また、他機関（ハローワークや就労支援センターなど）との連携が強まり、進路指導が進んだ。

○研修

- ・特別支援学校の学校公開に高等学校の教師が10名来校し、授業参観を行った。また、高等学校の授業公開日に高等支援学校から4名が参加した。

- ・両校で生徒の交流及び共同学習を行い、お互いの授業の中で得意なところを教え合い、学び合った。そのことで生徒の自己理解を深めることができた。

- ・大学教授等による講演会を実施した。（４回）

倉敷琴浦高等支援学校

平成27年 8月26日（水）、10月 5日（月）、平成28年 2月13日（土）

倉敷鷺羽高等学校

平成27年 9月29日（火）

- ・先進校視察（４校）をおこなった。（倉敷琴浦高等支援学校）

首都圏の東京都立永福学園高等部就業技術科、埼玉県立特別支援学校さいたま桜高等学園と、富山県の富山県立富山高等支援学校、富山県立高岡高等支援学校に行き、視察を行った。職業教育と高等学校との連携について学びを深めた。

○成果発表会（第２回就労支援ネットワーク）

平成28年 2月13日（土）に、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校などに案内を出し、２校の取組の成果を発表した。県内外を含め82名の参加があった。

○リーフレットの作成

両校の取り組みの成果を分かりやすく説明するためにA３両面印刷（A４を４ページ）のリーフレットを作成し、成果発表会当日の参加者や県内に配布した。

5 課題と今後の方策

岡山県立倉敷鷺羽高等学校では、課題として障害の診断がない生徒に対する指導や支援体制をどうするか。また、教師の発達障害に対する専門知識の向上と、発達障害を意識した「集中できる」または「わかりやすい」授業の実践をいかに行っていくか。また、今までの成果を継続していける体制づくりや人材の育成などがあげられた。今後の方策として、障害や気になる行動に気付いた時点で、中学生生活まで振り返り、中学校からの引き継ぎを確実にし、できるだけ早期から自己理解・自己分析を促す取組を行う。そして、授業や学校生活の中で、学業だけでなく生活全般を含めて「できること」「できないこと」などを考え、自覚できるように促す取組を行う。そして、本人が困らないためのネットワーク作りを障害者雇用枠での就労の如何に関わらず、利用できる機関の周知と関係づくりを含め、行うことが大切であるとする。次いで、実態把握や視覚支援を始めとする特別支援教育の視点を高等学校教育に研修を通して今まで以上に導入し、授業を構成する必要性がある。

岡山県立倉敷琴浦高等支援学校では、課題として、自己理解を深める取組の更なる充実と、授業の実践力の向上があげられた。今後の方策としては、体験を通した振り返りを通して、具体的な自己理解を重ねていく。そのためにも現場実習日誌や報告書、振り返りシートなどの項目の検討や取り組み方の検討による更なる改善と、日頃の授業全般を通して、キャリア教育の自己理解を促す視点を考慮した取組の促進が必要とされる。

最後に、両校を通した方針として、生徒が自己理解にいたる環境作りや深めるための教育。就労支援のネットワーク作りと職場開拓の充実をはかることなどが重要であると考えられる。